

課題部門 テーマ：気は心

優良賞「空から落ちてくるものは」 文学部日本文学科 3年2組 大石 来実

たしか、雨だったと思う。

中学 2 年生の修学旅行も、別々の進路に向かって歩き出したあの日も、十代最後の誕生日にも、たしか、雨が降っていた。

大切な日がいつも雨、というわけではない。ただ、思い返すと、大切な思い出のところで、雨の日があり、雨は何となく、思い出をすこし暗くしてしまう。雨が降るといつも、「雨の日は嫌い。何も無いのに、死にたい気持ちになる。」と言っていたあの子を思い出す。

しかし、私は雨の日は嫌いではない。以前は嫌いだった雨の日は嫌いではなくなったのは、趣味のカメラをはじめからだろう。

あの日の雨は、突然だった。朝の天気予報で、降水確率 30%と言っていた気象予報士は、誰かに恨まれていたかもしれない。午前中の快晴から一変し、どんよりした雲に覆われていった午後 3 時の街は、色をなくし、灰色の世界になった。すれ違う人たちは、ほとんど傘を持っていない。

雨が降りはじめた。同時に、前を歩く人たちが、鞆から折りたたみ傘を取り出している。先ほどまで灰色に染まっていた街が、色とりどりの傘で、みるみるうちに彩られていく。ストライプ、ドット、花柄、星柄。白、赤、ピンク、緑。綺麗だ、と思った。思わずカメラのシャッターを押したくなるような、そんな光景だった。きっと、カメラをはじめなければ、一生気付くことのなかった光景で、雨の日は、少しだけ好きになった。

降水確率 80%の今日、快晴である。傘を置いて家を出たくなる気持ちを抑え、持ったままで家を出た。快晴の中で、傘を持っている右手が少しだけ憎い。授業中、いつになったら雨が降るのかと外を眺める。授業終了のチャイムが鳴るまで、結局雨は降らなかった。

夜、アルバイト終わりに外に出ると、雨が降っていた。傘を持ってきて良かった、と思えたのもつかの間で、迎えを頼んでいる私には、やはり傘は必要なかった。無駄に増えてしまった傘との思い出を疎ましく思いながら迎えを待っていると、館内から出てきた女の子が言った。「あ～あ、空が泣いてるね。」

私と同じように迎えを待っていた人も、傘を忘れて立ち止まっていた人も、みんな彼女を見ていたと思う。そんなことには気付きもせず、彼女は友人と、ピンクの花柄の傘をさして歩いて行った。あの傘は、空の涙を受け止めるには、少し明るすぎる気がする。

一緒にその女の子を見ていた人に、傘を貸した。見ず知らずのその人に傘を貸した理由が、「困っている人の助けになりたかったから。」なんてかっこいい理由であれば良かったのだろう。しかし実際は、迎えを待っていた私に傘は必要なく、これから駅まで歩かなけ

ればならないその人には傘が必要だったという、ただそれだけの理由だった。

貸した、と言っても、きつともう、名前も知らないその人に会うことはないだろう。私の傘はこれから、新しい持ち主の下で暮らしていく。惜しむほどの思い出はない、どこにでも売っているビニール傘だが、大切にしてもらえるといい。

7月、たくさん雨が降った。たくさんたくさん、降り続いた。鳴りやまない避難勧告と、どこかから聞こえるサイレンの音を聞きながら、不安な夜を過ごした。

朝が来た。いまだに雨は降り続けているが、私にとっては、いつもと変わらない、平凡な朝だ。しかし、テレビに映し出された光景は、同じ広島とは思えない、目を疑うようなものだった。数年前に起きた、豪雨災害を思い出す。

スーパーから、食材が消えた。友人の家が、なくなった。誰かにとって、大切だったいのちが、消えた。

「雨の日は嫌いではない」は、嘘だ。私は雨の日が嫌いだ。一瞬で、こんなにもたくさんものを奪っていくなんて、あまりにも残酷すぎる。人は弱い。天災には、なすすべもない。無力だ、と思った。

多くの人々が、各地から被災地の復興支援に訪れている。離れた場所で暮らす友人からも、心配の連絡が毎日のように届いた。広島駅にかけられていた、「がんばろう広島」の文字。「がんばろう」。「がんばれ」ではなく、「がんばろう」だったことが嬉しかった。私たちは、一人ではない。

アルバイト先に設置してある募金箱への募金も、普段より何倍も多い。見ず知らずの誰かに支えられ、そして、誰かを支えている。私たちは、支えあいながら生きている。

アルバイトがある日は、募金箱にお財布の中の小銭を入れて帰る習慣が出来た。気は心で、はじめた習慣である。私にできることはこれくらいしかない。日に日に世間から忘れられていく出来事を、風化させたくない。

また、雨が降っている。あの日の女の子は今日もどこかで、「空が泣いてるね。」と言っているのだろうか。泣いている空をなぐさめるために、私は何色の傘を選べば良いのだろうか。あなたは、何色の傘を選びますか。

<講評>

本作品には華がある。それは、構成力と文章力に負うところが大きい。特に書き出しが上手い。雨空と色とりどりの傘の対比という色彩感、センテンスの短い歯切れ良い文章が作文ではないエッセイとして本作を支えており、雨の日の街のいろいろな情景や心象風景がカラフルに描写されている。加えて、自分の変化を示す着地点は、やや朝日新聞的良識感もあるが作品全体に安定感を与えている。特記するに、ひとつの事象をまえに、ふたつの側面を描写する発想と文章力は、きわめて秀逸である。災害をもたらす雨の厳しい顔と、包み込むような優しい雨の顔の両面を、筆者独特の優しい視点とタッチで表現している。誰もがもつ雨にまつわる思い出を大切にしたいと思わせる優れたエッセイである。特に、雨を巡って生起する出来事によって、変化していく感情のコントラストが面白い。雨が生み出す日常の風景に揺り動かされる筆者の感情が、リズムカルな文体で語られるとき、読者もいつしか筆者の視点に引き込まれるが、同時にそこは筆者の成長の軌跡でもあり、それが読者に共感と安心感を与えている。総じて、筆者なりのややユニークな内容で、人の心を惹きつけるような情感のある読み易い文章で書かれた優れたエッセイと言える。

審査委員／吉目木晴彦、八木秀文、大庭由子、小倉有子、富岡治明（委員長）